

随

想

「感慨」

六度目の年男を迎えた。2年前、古希になった時には、サブプライムローンの影響による先行き懸念はあったものの内外経済はまだ好調を続けており、「七十にして心の欲するところに従えども、矩を越えず」との余裕があった。

2年経ち、その間、かつてない規模での世界同時不況が到来し、経済成長の軸が西側先進国から東側の中国を含むアジア諸国に移ってきたことを痛切に実感して来た。会社人間としては、「矩を越えず」と悠長に構

えておれない焦燥感を抱いたこともあったが、エールとして発信し続けた「後生を畏るべし」の次世代がしっかり手を打って当面の危機を回避してくれた。

政治、経済、社会、企業内、いずれの切り口からみても問題のない時期はなく、常に心配事や大きな変化の中で生きてきた感がある。その意味で現在の大きな経済変動も歴史の一コマから見れば過去のそれと決定的な違いは無いとも言える。

例えば、12年を一区切りにして、各周年はどんな年であったのだろうか。6度目の年男ともなれば、一度振り返ってみるのも無駄ではない。私の生まれた昭和13年は近衛首相の下、前年の盧溝橋事件に続いて国家総動員法が公布された年

であり、戦時体制への移行期であった。両親は5人目の男子誕生をどう思ったのかわからない。12歳となった昭和25年は吉田首相時代、朝鮮戦争が勃発した。記憶にあるのは戦後の空腹とマッカーサーの偉い人ということである。24歳の昭和37年は所得倍増の池田首相時代であり、キューバ危機も発生して新入社員ではあったが、熊本の工場で、高度成長への確かな歩みを実感した。村山の活躍で阪神が優勝したりとある意味幸せな年代であった。

48歳の昭和61年は中曽根首相率いる自民が衆参両院で惨敗した。3年後、9・11米国同時多発テロ事件にあって、翌年のブラックマンデー以降の株価暴落を

アジア通貨危機2年目、国内は2年連続のマイナス成長となり橋本自民は参院選で惨敗した。3年後、9・11米国同時多発テロ事件により、世界は一変する。ミラノに到着した時「Twi

予期するはずもなかった。駐在中のNYで、現地株市場が一日で22・6%下落したのを鮮明に記憶しているが、その衝撃はリーマンショックに劣らざるの気もする。そして60歳の平成10年は

この事件と無縁でない。72歳の今年、ますます巨大化と複雑化に向かうグローバル世界の中で、国も企業も如何に持続的成長を目指すか。日本の強みである技術開発を通して個人と組織の

六度目の年男

東海カーボ会長

大嶽史記夫



もなくなるが昨年は大きな感動をもらった。母校名大柔道部の七大学戦久方ぶりの優勝である。

柔道は今や決してメジャーなスポーツではないし、七大学戦といっても一般には余り知られていない。この試合は、寝技を重視する旧高専柔道大会の流れを汲む旧七帝大対抗戦のことであり、選手15人の勝ち抜き1本勝負である。

作家井上靖の自伝的小説「北の海」の中で、しろうばんは、夏草冬濤時代を経た「洪作」が四高柔道部で出会った言葉「練習量がすべてを決定する」を伝承する柔道である。小説内の重要人物「大天井」は、後に名大柔道部師範として90歳を超えてまで現役指導され、部員達から慈父の如く慕われた「小阪光之介」先生のこ

この年になると、滅多なことでは涙ぐむほどの感動

「練習量がすべてを決定する柔道」とは何か。立ち技は体格や運動神経に秀でているものが有利である。寝技は天分や体格に恵まれなくとも、練習量と物理的工夫、具体的には両手の力よりのもはるかに強い足の力も利用することによって弱者が強敵にも互角に戦える柔道である。七大学柔道戦は、寝技を主体として、抜き役は必ず抜く、それも出るだけ多くの相手を抜く、分け役は相手が強くても必ず分ける。究極は仲間を信じて己の役割を全うすればチームは必ず勝つという教えである。

日本の将来を託す若者の中にこんな素晴らしい先輩たちが居てくれた喜びから溢れたものに相違ない。後輩達の2連覇に阪神の優勝も重なって昨年以上の感動が味わえる周年を念じて！

2010年1月

2010年1月